

「揖保川を語り、生かす集い」山崎会場 結果概要

日時：平成15年5月17日(土)(14:00~16:30)

場所：山崎町 山崎防災センター ホール

参加者：委員12名、発表者6名、河川管理者13名、一般参加者16名

1. 開会

開会挨拶 藤田委員長

2. 揖保川流域委員会について

「河川整備計画について」 国土交通省姫路河川国道事務所 那須所長

「揖保川流域委員会の活動状況について」 藤田委員長

3. 住民からの意見発表

幸福重信氏(波賀町)

- ・今、これだけ破壊された環境問題は、ただ川だけで論じることはできない。森、川、そしてこれを利用する都市生活者、漁民、いわば森、川を利用する者が一体となってどういう環境をつくり上げていくかを考えていかなければならない。
- ・山は手入れが行き届かず、荒れて崩壊し、裸地以上の状態と言える。雨が降り、荒廃した森林の樹木と一緒に崩壊してきたら、非常に大きな災害につながる。河川改修においてこういうリスクを大きく見ざるをえないため、安全率を見すぎているのではないかと思う。
- ・自分の村では河川改修が進み、地域で一番の古木だったソメイヨシノが伐採され、子どもたちがクルミを拾っていたオニグルミやたくさんあったヤナギも1本もなくなった。(護岸の)階段は勾配が急で、お年寄りには川へ下りられない。県民、国民だれでもが川と親しむことができる川が国民に共通して愛される川だと思う。一方の事例として、八丈川では改修後8年しかたっていないが、工事で出た石を積み、川幅をきちんと作り、瀬があり、淵があり、木がある川となっている。水を流すことも必要だが、川の周囲の空間、河川空間というものをいかに考えるか、これが河川改修のこれから目指す方向だと思う。
- ・私は、この川を住民で守っていかなくてはならないと決意し、カワニナの養殖、ホタルの養殖に取り組み、またネコヤナギを植えたり、土手の草刈りをしたりして、川を守ってきた。
- ・河川改修で、水だけきれいに流す川になると、必ず河川改修したところは瀬ばかりになって、水裏がなくなるので淵ができない。淵があってはじめて大きな魚が育ち、アユのたまり場にもなっていくので、そういう川づくりを期待し、先生方と一緒に河川を考えていくべきである。
- ・波賀町では漁民の方に、木を植えてもらい漁民の森ができた。水を供給する山の人間、それを利用して恩恵を受ける里の人間、海の間人も含めて、三位一体となって環境を守り、向上させていかなければならない。

古賀弘一氏(太子町)

- ・分科会において揖保川を子どもたちの教育の場にしよう、学校教育の総合学習に取り込んでいこうという提案があったが、これに基本的に賛成である。揖保川という素晴らしい川に触れて、子どもたちに歴史や文化を知ってもらい、また、自然、環境ということを学んでもらいたい。
- ・子どもたちへの教育は、大人の押し付けがましい教育にならないよう気をつけなければならず、子どもたち自身が自ら発見し、学ぶことが大事である。大人たちは子どもたちが川と水に親しめる場だけをつくれればよく、最初だけ川とのつき合い方を誘導してあげればいいのか。押しつけ教育は本当の意味で子どもたちの身につかず、子どもたちのためにならないと思う。

- ・原風景という言葉があるが、子どもたちが大人になったとき、揖保川が彼らにとっての原風景であってほしいと願う。原風景とは子どもたち自らが遊ぶ場所を見つけ、そこで自分たちが思いっきり遊んだ体験が原風景になっていくのだと思う。
- ・人工的に整備された河川敷、公園、グラウンドが揖保川の個性では決してないはずである。ありのままの自然の姿が揖保川の個性ではないか。最低限の安全性を確保すれば自然のままでもよく、そこで子どもたちは自由に遊び、危険をも学び、水に触れ、風を感じ、花や草木をめで、いろいろな生物を発見する。そこから子どもたちが自ら得るものは多く、そうやって得たものはかけがえなく大きいと思う。
- ・きれいに整備された河川敷の公園やグラウンドなどはいらぬ。揖保川に最もふさわしいデザインはありのままの自然景観であり、それが学ぶ主体である子どもたちにとって最も重要な揖保川の姿だと思う。人間はもっと自然に対して謙虚になり、開発に対しありのままの自然が少しでも長く残せる、後世に引き継げるということを念頭におく必要がある。

小林浩一氏(一宮町)

- ・釣り人としての意見を述べたい。河川工事は個人の財産などを守るために必要なことというのは理解できるが、工事で大きな石を川の両端に動かしてある。工事をするうえで邪魔になるのかもしれないが、元の位置に戻していただきたい。川は石に流れが当たり、水に変化があってはじめて魚が育つ環境ができる。小さい石ばかりになると魚が隠れるところなくなり、すむところなくなり、魚がいなくなってしまう。流れのないところにあるネコヤナギがなくなってしまうということも、大きな石がなくなってきたからということだと思う。
- ・次に、親としての意見を述べたい。子どものころ、夏休みになると毎日川へ行き、水中眼鏡で潜り、魚を取っていた。大きな石と小さい石がかみあい、そこに空間ができ、手を入れると魚がいた。それを子どもに教えようと思っているが、最近はその石の間の空間が減っています。それから川に行っても下りるところがない。両岸が完全にコンクリート護岸になってしまうと、川と親しもうにも下りられない。子どもと遊ぶというと、川で遊んだり山で遊んだりすることが一番多く、自分が遊んだところは大切にしたいし、自分の子どもや孫に伝えていきたいという気持ちが芽生えてくるのではないかと思う。親から学んだり自分が体験したことの方が、自然に対する態度に表れてくるのではないかと思う。
- ・火災の際、水を取るのに困るところがあり、河川改修のときには消防水利も考えていただきたい。

高井佳彦氏(山崎町、揖保川漁業協同組合)

- ・近年、水質もよくなり天然アユの遡上も見られるようになったが、井堰等がたくさんあって、上流まで遡上できていないというのが現状だと思う。各井堰の魚道は、遡上しにくい魚道がほとんどであり、魚道整備を含めた横断構造物、井堰等の統合および改良をしていただきたい。また、井堰の上流では土砂が堆積して大きな石が埋まり、魚の住む場所が少なくなり、河川環境が悪化している。土砂を撤去し、河川環境を改善していただきたい。
- ・昨年、下水道処理施設の排水口付近にアユをつけて観察をしたが、1日以内に全部の箇所でもアユが死んでしまった。近年は河床に水草等が異常繁殖することも多く、昨年のような雨の少ないときには現行の排水基準では河川環境に大きな影響があるのではないかと。水質および河床の土質調査などもしていただきたい。
- ・河川工事の際、工事業者さんと話をすることもあるが、ここはこんなふうにしてもらいたいということを言っても、その段階では何も言えない状況である。設計段階から地域住民の意見を幅広く取り入れてもらい、工事発注についてはコンペ方式を採用していただきたい。

田口五月氏(山崎町)

- ・山崎町矢原に中州があるが、昭和 51 年の災害のときに、たくさんの木材が流れてきて、中州の木に引っかかり、高いところの田んぼにまで水が入ってきたということがあった。自然を残していただく必要はあるが、大きな木は何とかしていただきたい。また、中州には、たくさんの動物が住んでおり、少し見直していただければ、川を子どもたちが渡り、そこで遊べるのではないかと思う。西側は浅くて歩きやすいとも思うので、そういう面から見直していただければ、アユの釣り場にもなっていくのではないかと思う。
- ・いろいろなところに道の駅があるが、揖保川のどこかに川の駅というのがあってもいいのではないかと思う。揖保川の下流に行くところと揖保川町、龍野市、新宮町などで河川敷が整備され、娯楽・スポーツの場が面で整備されている。高齢者が散歩をし、話し合いができる場所なども必要ではないかと思う。
- ・昨年、高齢者の方が、川辺に下りるとき、草の上を歩いて滑り、けがをされた方がいる。川に入るところの整備を少し考えていただければと思う。

久宗丑雄氏(山崎町)

- ・山崎町にある「山崎植物同好会」と「水生生物調査会」の活動について説明する。「山崎植物同好会」は、昭和 60 年頃、宍粟郡の 23 小学校の理科主任が集まって始めた活動で、自然に親しみ、自然を愛するという教育を子どもたちにしていくことを目的に、国有林や神社、原始林的なところの植物採取会などを行っている。現在は学校の教員以外にも会員が増え、150 あまりの会員で活動している。「水生生物調査会」は、昭和 63 年ごろから活動しており、山崎町の中学校 3 校と小学校 6 校が参加し、町内の 9 地点で、子どもたちと一緒に川の中の水生生物による水質調査を実施している。これらの活動において、川の水が美しくなっていくようにということの説明し、子どもたちからも喜んで参加してもらっている。
- ・以前は、家庭から出るいろいろなごみを河原に持っていき、捨てていた。しかし、10 年ほど前から、自治会組織が川の草刈りや、掃除を実施するようになり、それ以来、河原へごみを持って行って捨てるような人はなくなった。地域全体が川を美しくしようという意欲に燃え、今では河原へごみを捨てたりするような人はいなくなった。今は町民全体が川を美しくするために協力しているので、喜んでいいる。

意見発表後、発表者への質疑応答が行われた。

(委員から発表者への質問)アユの観察をしたのはどの地区で行ったのか。

(回答)部落単位で処理している下水処理場の排水口付近で行った。

(委員から発表者への質問)「山崎植物同好会」「水生生物調査会」に参加した子どもさんは成人されていると思うが、その方たちが今どう感じておられ、取り組みの輪が広がっているといったことがあるのか。

(回答)学校の先生からは、子どもたちが川を愛するようになり、川に親しみを持つようになったということを知ることが、卒業生から直接そういうことを聞いたことはない。

(委員から発表者への質問)是非残したい揖保川の風景、自分の原風景となる場所、スポットについて教えていただきたい。

(回答)波賀町原地区の八丈川(幸福氏)。龍野橋から望む鶏籠山の風景(古賀氏)。揖保川の大きな石(小林氏)。山崎町十二波付近の揖保川(高井氏、田口氏)。伊沢川の水の美しい川(久宗氏)

4 . 意見交換

発表者、その他の参加者、委員を交えて意見交換が行われました。主な発言は以下のとおりです。

十二波のところで河川改修を予定していると聞いている。夏になると子どもたちが泳ぐ場所なので、川へ下りていきやすい河川改修をしてほしい。

(委員の発言)河川はできるだけ昔あった河川の状態にしておいてほしい、川へ遊びにいったり、釣りに行くとき両側が堤防で囲まれていて川に下りにくくなったという意見があった。一方で、堤防を整備することで洪水に対する安全度が上がったことは事実だと思う。こういう川であってほしいという希望はある反面、何かを得ようとするとか何かを失わなければいけないというところがある。やはりそこに住み、川を利用されている方が最終的に何を望むかという意思決定が河川整備に反映されるべきだと思う。

農業用の井堰は、50cm～1mの高さのコンクリート、または昔の形式の井堰があれば、水を取水できるのではないかと。川幅全体の水門をつくっているが、なぜ工事費、管理費のかかるものをつくらなければならないのか。

(委員から参加者全員への質問)

自分の家の屋根に降った雨を生活用水として使っている方はおられるか。また、家に降った雨はできるだけ地下に浸透するように工夫している方はおられるか。 挙手なし

上流部には、堤防がなく治水が進んでいない場所が多いが、洪水に対して不安を感じている方はおられるか。 2名挙手

5 . 閉会